

<h1>指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 平成29年10月発行</p>	<h2>教育相談 第137号</h2>	
	<b>対象 校種</b>	小学校 中学校 義務教育学校 高等学校 特別支援学校

### 学校適応感を高める定期教育相談の進め方 — 「比較用『学校楽しいーと』」を活用して—

児童生徒の学校不適応の状態が長期化すると、学習の遅れや生活リズムの乱れなどが生じて支援が困難になる傾向がある。そこで、児童生徒の学校適応感を高めるために、学校適応感の変容が分かる「比較用『学校楽しいーと』」を活用した定期教育相談の進め方を紹介する。

学校は、全ての児童生徒が自己の能力を発揮でき、安心感が得られる活動の場であることが大切であるが、本県のいじめの認知件数や不登校の児童生徒数は以下のような状況にある（表1）。

表1 平成27年度のいじめと不登校の状況

本県のいじめの状況			
	H27 いじめ 認知件数	100人当たりの件数 〔認知件数÷児童生徒数×100〕	増減率 〔(H27件数÷H26件数×100)-100〕
小学校	3,228件	3.57件	47.87%
中学校	1,855件	4.10件	-8.80%
高等学校	883件	2.77件	5.12%

本県の不登校の状況			
	H27 不登校 児童生徒数	100人当たりの在籍数 〔認知件数÷児童生徒数×100〕	増減率 〔(H27件数÷H26件数×100)-100〕
小学校	289人	0.32人	28.44%
中学校	1,458人	3.22人	10.71%
高等学校	678人	2.13人	-5.57%

このように、不登校やいじめの状態は依然として深刻な状況が続いており、教師が児童生徒の学校適応感を的確に捉えて支援する取組がますます求められている。

児童生徒の支援においては、学校不適応の状態が深刻化する前の早期発見・早期対応が重要になる。児童生徒の学校適応感とは、対人関係や学習環境等の状況によって変わりやすいため、早期発見につなげるためには、日常の言動の観察、調査や検査の分析、教師・保護

者間の情報交換などから多角的・多面的に把握する姿勢が必要となる。また、早期対応では、児童生徒の学校不適応感の要因や背景を理解して学校不適応の軽減を図る教育相談を実施することが必要になる。

定期教育相談は、年間計画に教育相談週間を位置付け、児童生徒一人一人を対象に実施する教育相談である。実施に当たっては、教師が相談前に児童生徒一人一人の学校適応感を把握しておき、予め焦点を当てる内容を定めて教育相談を進めることが早期発見・早期対応において有効である。

そこで、定期教育相談を効果的に進めるために「比較用『学校楽しいーと』」の活用について述べる。

#### 1 「比較用『学校楽しいーと』」とは

「学校楽しいーと」は、当センターが「友達との関係」、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」の6つの観点から児童生徒の学校適応感を捉える質問紙として平成24年度に開発した。その後、「学校楽しいーと」の普及に伴い、活用した学校から“結果を比較できるようにしてほしい”という要望に応じて、

平成28年度に最大3回分までの回答を一覧で確認できる「学校楽しいーと」として改善したのが「比較用『学校楽しいーと』」である。また、この他の改善点は、次の通りである。

- レーダーチャートの軸を4～16の幅にして傾向や特徴を捉えやすくした。
- 下位項目の表では「1」、「2」の回答を強調して表示するようにした。
- オプションボタンで児童生徒の回答を入力できるようにし、タブレット端末でも操作できるようにした。
- クラス全員の個票を同時に連続印刷できるようにした。

従来の「学校楽しいーと」の個票では、レーダーチャートで個人と学級平均値のデータを表示するよう設定していたが、「比較用『学校楽しいーと』」では、個人のデータのみを表示するよう設定している。

そのために、個人のデータを学級平均値と見比べる際は、学級票と個票を出力して並べて活用することが望ましい。

## 2 個票から読み取れるウィークポイントとストロングポイント

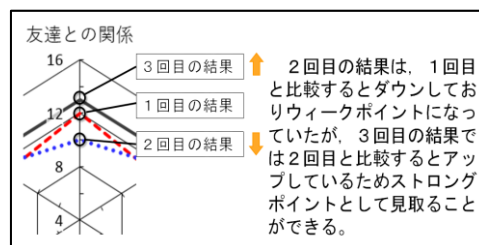
「学校楽しいーと」を効果的に活用するためには、個票から児童生徒の学校適応感のウィークポイント、ストロングポイントを見取り、支援につなぐことが重要となる。

ウィークポイントとは、児童生徒の学校適応感の低い値を示すところであり、児童生徒が困り感を抱いているところを示すサインとして見取ることができる。一方、ストロングポイントとは、児童生徒の学校適応感が高い値を示すところであり、児童生徒が自分の「よき」として認めているところのサインとして見取ることができる。

「比較用『学校楽しいーと』」の個票や学級票では、過去の回答結果と比較することで

ウィークポイント、ストロングポイントの変容を分析できるため、児童生徒の成長や発達を見取る有効なデータになる。以下に「比較用『学校楽しいーと』」から変容を分析する際の留意点を示す。

### ① レーダーチャートの形状に着目

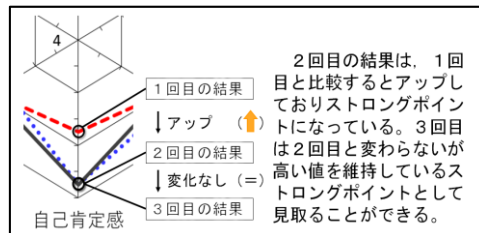


### ② 下位項目の値の高低に着目

観点	質問	1回目	2回目	3回目
友 達 と の 関 係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。	3	3	3
	8 学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。	3	2	④ ↑
	14 学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。	3	3	3
	20 自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。	3	2	③ ↑

8と20の項目において、2回目の結果が「2」の回答であることからウィークポイントになっていたが、3回目の調査では「4」と「3」の回答であることからストロングポイントとして見取ることができる。

### ③ 変わらないところにも着目



このように、「比較用『学校楽しいーと』」は、学校での様子の観察では把握することが困難なウィークポイント、ストロングポイントの変容を捉えることができるため、個票は児童生徒の個別支援に、学級票は学級経営の目標や具体策の設定・改善に活用できる資料となる。



### 3 「比較用『学校楽しいーと』」を活用した 定期教育相談の年間計画

定期教育相談は、単発的に実施するのではなく、児童生徒の成長・発達を支援する視点で継続的に実施することが大切になる。そのためにも、定期教育相談は年間計画に基づき、検証改善サイクル〔R-PDCAサイクル〕を踏まえて実施するようにしたい。

R-PDCAサイクルとは、「Research（児童生徒の実態を把握する）→Plan（『課題』を明らかにし、『目標』、『取組内容』の支援計画を設定する）→Do（支援計画を実行する）→Check（支援の成果を定期的に『点検』する）→Act（『課題』、『目標』、『取組内容』を修正する）→Plan（新たな支援計画を設定する）」の段階を継続的に繰り返して進めていく指導・支援の在り方である（図1）。

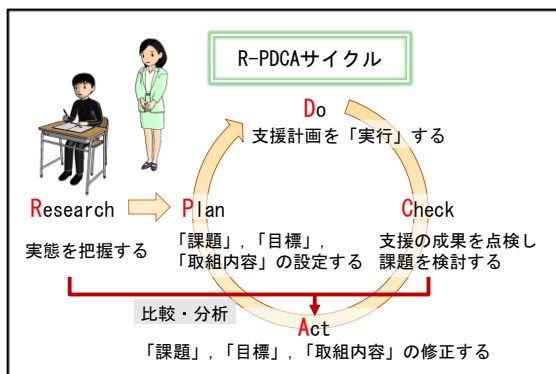


図1 検証改善サイクルに基づく年間計画

1学期始めに実施する1回目の定期教育相談は「児童生徒の実態を把握することを目的とする面談（Researchの段階）」となり、2回目以降の定期教育相談は「支援の成果を確認する面談（Checkの段階）」となる。

「比較用『学校楽しいーと』」は、定期教育相談の面談を有効に進めることのできるアセスメントシートとして活用できる。

そこで、「比較用『学校楽しいーと』」を活用する定期教育相談をR-PDCAサイクルに基づいた年間計画に組み入れて、継続的に支援活動を展開していく取組例を右に示す。

月	年間計画	
4	・ 年間計画を確認する。	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1回目の「学校楽しいーと」を実施する。</li> <li>・ 複数の教師で児童生徒の個票から学校適応感を分析し（ウィークポイント、ストロングポイントの見取り）、定期教育相談で焦点にする内容を検討する。</li> <li>・ 1回目の定期教育相談を実施し、面談から児童生徒の学校適応感の理解を深める。</li> <li>・ 2学期の定期教育相談までの支援計画を学年会で検討する。</li> </ul>	R P
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援計画を実行する。</li> <li>・ 学校不適応感を強く抱いている児童生徒には、定期教育相談期間終了後にも再度面談を実施する。</li> </ul>	D
7	・ 支援計画を実行する。	
8	・ 個別面談を実施する。	
9	・ 支援計画を実行する。	
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2回目の「学校楽しいーと」を実施する。</li> <li>・ 複数の教師で1回目と2回目の結果と比較して児童生徒の学校適応感の変容を分析し（ストロングポイント、ウィークポイントを見取る）、定期教育相談で焦点にする内容について検討する。</li> <li>・ 2回目の定期教育相談を実施し、面談から児童生徒の学校適応感の変容について理解を深める。</li> <li>・ 3学期の定期教育相談までの支援計画を学年会で見直し、計画を修正する。</li> </ul>	C A P
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援計画を実行する。</li> <li>・ 学校不適応感を強く抱いている児童生徒には、定期教育相談期間終了後に改めて面談を実施する。</li> </ul>	D
12	・ 支援計画を実行する。	
1	・ 支援計画を実行する。	
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3回目の「学校楽しいーと」を実施する。</li> <li>・ 複数の教師で2回目と3回目の結果と比較して児童生徒の学校適応感の変容を分析し（ストロングポイント、ウィークポイントを見取る）、定期教育相談で焦点にする内容について検討する。</li> <li>・ 3回目の定期教育相談を実施し、面談から児童生徒の学校適応感の変容について理解を深める。</li> </ul>	C
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援の成果を学年会で検討する。</li> <li>・ 学校不適応感を強く抱いている児童生徒には、定期教育相談期間終了後に改めて面談を実施する。</li> </ul>	A D
R=Research P=Plan D=Do C=Check A=Act		

#### 4 「比較用『学校楽しいーと』」を活用した面談例

ResearchとCheckの段階で実施する定期教育相談では、児童生徒が思っていることや考えていることを傾聴することで、児童生徒をよりの確に把握して指導・支援を具体的に検討できる機会となる。「比較用『学校楽しいーと』」を用いた定期教育相談を実施する際、教師はウィークポイントについては共感し寄り

添う姿勢で対応し、児童生徒が「よさ」と認めているストロングポイントについては肯定的に支持する姿勢で対応することが大切になる。

そこで、具体的な事例を基に「比較用『学校楽しいーと』」を活用した定期教育相談の実際を示す。

**【10月の定期教育相談の場面】**

担任と中学2年生のA子の定期教育相談の場面である。担任は、面談前にA子の「比較用『学校楽しいーと』」を診て、5月中旬（1回目）の頃よりも、「友達との関係」は下がっているが、「学習意欲」は上がっていることに気づき、その変容に焦点を当てて面談を進めることにした。

担任：1学期の定期教育相談と同じように、先日、実施した「学校楽しいーと」の結果を使って面談を進めます。

A子：はい、分かりました。

担任：1学期の頃に比べて、自分から進んで学習しようと努力しているようだね。  
**【まずはストロングポイントを認める】**  
何かきっかけがあったのかな？  
**【開かれた質問で考えや思いを引き出す】**

A子：はい。夏休みにかわいがっていた犬が死んでしまって、将来、獣医になりたいと考えるようになりました。そのためには、積極的に学習することが大切だと思うようになって、1学期よりも努力できていると思います。

担任：そうか、将来、獣医になりたいという思いがあるんだね。  
自分の進路を考えて努力しようという熱い思いも先生に伝わりました。先生にできることがあったら相談してください。応援します。【承認し、支持する】

A子：はい、ありがとうございます。先生に自分の進路について話ができてよかったと思います。

担任：あと、1学期に比べて、友達との関係で心配していることがあるようだね。何かあったのかな？  
**【ウィークポイントに関心があることを伝え、開かれた質問で考えや思いを引き出す】**

A子：…。実は、友達には遊びや部活の悩みを話せるのですが、今、先生に話した進路の悩みは話せないんです。あと半年で3年生になるので、友達も進路のことについていろいろと考えていると思うのですが…。なかなか話ができてなくて…。

担任：そうか、進路のことを友達に相談できずに思い悩んでいたんだね。【共感的に理解しようと努める】  
来週の学活の時間は進路について語り合う活動を考えてみようか？【支援策を提案する】

A子：そうしてもらえると、いろんな話ができます。ありがとうございます。

観点	質問	1回目	2回目	3回目	観点
友達の関係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。	4	4		教師との関係
	8 学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。	3	3		
	14 学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。	4	2		
	20 自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。	3	3		
学習意欲	5 授業中に「できた」「わかった」と感じることもある。	3	3		自己肯定感
	12 授業中は、先生の話をよく聞いている。	3	3		
	18 授業中、自分から進んで学習に取り組んでいる。	3	4		
	24 学習した内容をきちんと理解するための、自分なりの学習の仕方がある。	3	4		

定期教育相談は、児童生徒理解を深める目的で実施する面談になるが、事例のように、「比較用『学校楽しいーと』」を活用することで、児童生徒の学校適応感を高められる支援効果も期待できる。

「学校楽しいーと」の回答には、教師に伝えたいメッセージが込められている。

定期教育相談では、児童生徒が“分かっ

てほしい思いが伝わってよかった”という安心感・安堵感を得られるように面談を進めていくことを大切にしたい。

—参考文献—

- 文部科学省 平成 27 年度『児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査』
- 県総合教育センター 「児童生徒の豊かな人間関係 づくりに関する研究 -SNS の利用による友人関係 に着目して-」 平成 29 年 研究紀要

(教育相談課 宇都慎一郎)